<table>
<thead>
<tr>
<th>Title</th>
<th>「唐糸草子」解題・翻刻</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>Sub Title</td>
<td></td>
</tr>
<tr>
<td>Author</td>
<td>石川, 透(Ishikawa, Tohru)</td>
</tr>
<tr>
<td>Publisher</td>
<td>慶應義塾大学国文学研究室</td>
</tr>
<tr>
<td>Publication year</td>
<td>1998</td>
</tr>
<tr>
<td>Jtitle</td>
<td>三田國文 No.27 (1998. 3), p.70- 81</td>
</tr>
<tr>
<td>Abstract</td>
<td>資料紹介</td>
</tr>
<tr>
<td>Genre</td>
<td>Departmental Bulletin Paper</td>
</tr>
</tbody>
</table>
解題

『唐系草子』

石川透

解題・翻刻

『唐系草子』は、御伽文庫三編の一として、有名な作品である。御伽文庫本には、江戸初期の写しも現存している。本書は、江戸初期の写しとされ、写本としては、現存最古の部類に属するものである。

本書を他本と較べると、独自の異文が目立つ。単純な誤字や脱文と思われるものもあるが、鎌倉から信濃へ向かうことを『のほる』と表現したり、他本にない表現がみられるなど、明らかに本文を変えようとしている点も多い。また、『から系』の舞のように、『前』にあるべきところを『舞』と表記するところなどは、幸若舞曲『伏見常楽』等にも見られ、江戸初期の特徴を示すものかもしれない。

なお、末尾に記される『佐草清三郎利満筆』と『茂秀書』の文字は同筆で、本文とは別筆にみえる。『利満』と『茂秀』は、名前からするが近親関係のようだ。どのような人物なのかはわからないが、『弘文広事紀古文』第三十号に『佐草待賢書』と佐草直清手写り中略第四編の末に同筆にて『佐草藏書』として『直清之印』とされる大形朱印あり。とある記述がある。ま

「国書総目録」著者別索引には『佐草清三郎利満神道燈事雑筆』ということがある。いずれも生存した時代ははっきりしないが、
「唐末草子」

長い永八年と比んたおりかんならこかん、ひゃう、のすけとりともは、
はつか国のすふらひたちを、皆、かまくらへかふるひは、 chóう
はもんに出させ給ひて、さふらひたちにおふせば、にかに
かくく、聞絵へ。そもく、平家は、よりとちかいいせににお
して、都をそおちて候へ。きそのはさまのかみよしなか、十郎
やなは、ほほといふ、わらかうみやかぼにて、くわんはくに
くわんしやゆきいが、わらかうみやかぼにて、かくと
やくこらや、きつくわいなれ。平家たちのきさきに、よしなか
をたいちせんと、さたけのくわんしや、うけたまはり、見申
みちのくのひてひらも、九郎くわんしやよしほのほせんと
たくせよとそおふせり。みなく、此月の中比なるへ。せいをのこすけすね給へ、し
おふし。其比。かまくら殿に、から国のまひと、御所か
おはあり。是は、しのの国の、きそとのきふらひ、て
たのかたのくわんしやかみつうちよりかむすめ、ひのやうす也。殊
すくけてあれはとて、十八のとしほ、かまくらへめしのほせ、く
わんけんのさしみをあつけられる。

から糸、此よしをうけたまはり、情なの事や。きそ殿のめつ
ほうは、おやぬほをみ。いかにしても、此事をきそ殿にし
らせてしまったらんて、ひととまえ所へ忍ひ、ふみこにと書
けに、かまくらを出て、十三日と申には、都にて、ち
のてつかをそらしやにて、かの文を、きそ殿へこそたてまったれ。
まつ岡とのへ。あづけをきたてまられ。「ちや」とおはせけて
まるがのへ。つちやは、からいとのまひのつほねにて、きそと
の文を見つけて、よりともへ奉る。ひやうへのふけと、
御らせして、天のあたふるたからなりて、八まんの御ぼうて
るに、おさめをかる、也。
そのち、「からいとせ」とそこおぼせける。つちや、つけ
まはり、まつ岡殿、きこしめし。「そおまく。つちやと、
日本のぬしとなろうものか、礼儀、はつをしらけ。仏はあく
ぬしにはなりかたし。いかに、もとつと、物をしらけ。南の
人をたつたけ、じようとをたて給ふ。そのこく、此かいて
いも、あくつたけんためのしゆつけは、ふっしみをたつる也。
たとえ、もしむかってゆみをひき、おやむかて刀をぬ
き。上はのくびをきりたるも、さんりんしたるあく人に、
しほしはあらしとおもふに。さゆうなとかせん人は、さい
けにあけをかすして、みつからにあつてき、たとえのふと
き。申におよばせ、みつからは、しほと申、をなといひ、
よりともにももくめて、はしをかす、するか、したをくわんと御
はらたち、ちからおよばす、もとけは、御所さまへまわり。
此よしをそ申さるけ。
くらへおこしたつ。よりとも、きましめ、まつくこたな
から系のふねらぎ、若君さまのくぼうにをよぼす。
そのち、からいとは、しなの国に、八方にあまるぼう
 overlooked...
や、うまくもうけたまえはり。「御とも甲様で、いつも野のすき、山のおくまで、火の中水のこそまでも、ともに、いりしつみ
申へ。御心さすくおほしめせ、にかう様」と申げる。
にか、きこしめし。「その後きらは、かまくらへまいるて、
から流をおなりと、たつねてまいりはこそ、人もふしひきにお
ふちわのうちうやと申て、ゆふきょう上人のたたまふふ
寺あり。しる人のあれは、たうしゃにかくれいて、御身はか
るへすきなり」とおほせ。
かまくらへすきなり」とおほせ。

まんしゆへひは、あめのみやをたち出て、とれる所はとこ
のまえのたすき、人をおやの子をおもふなさい、は
の山のすえを分るかや。子かおやをおもふみなさきとき。す
ienieをかへまし、「なむ八幡たひおさ、よろずの御神
にて、親かかの御神と、おけたまはり候へ、かざ母のか
ら ليس、のいのちの有うちに、めくりあはせたたか給へ」と、
かんたんくたきて、いのられい。

其夜はこもり、すぐて、その夜も明ければ、文まくら、とか
れたり。「みつかからは、何事なく、かまくらへまいりて候。と

一七一
二十日の夜、かりの脇、心にかけて聞けば、からいといふ名をさへ申せばは、ある日の夜の宵に、あまじゆ桜の、めのとに人を、もう人、るゝば、二十日すくらうち、からいと桜名さへ人の申さねは、浮世界的ものか。けちて此世にあるものを、よもらしか、沙汰するならばひあるに、今は、名をさへ申さねは、きあしき、沙汰するならへあるに、三日が其間、尋きて、あはってはてな、かなしやう、と、ふしみ、りうていかかれ、ものと、おほさにはらをたて、しびなを出し、その時は、二十二年も也、かまくら中にままさんへは、淚の色にて人にしられ、かななり、しほいにあひたまは、おほさあり、未二日もすきさるに、御涙なんさかせ給ふ、大切なこそ、かやをなのはり申さし。御奉公申せとの給ひげり。つほねのかたへあつげ給ふ。まんしゅは、多いのぼれ、とて、情をこそ給ふ。

二十一日はかりの其間、心にかけて聞けば、からいとやうい、申へ申さねは、ある日の夜の宵に、あまじゆ桜の、めのとに人を、もう人、るゝば、二十日すくらうち、からいと桜名さへ人の申さねは、浮世界的ものか。けちて此世にあるものを、よもらしか、沙汰するならへあるに、今は、名をさへ申さねは、きあしき、沙汰するならへあるに。
から糸、きこしめし、その時、なんしゅ、手をとるて、うれしなきになぜこぶ。御淚をおさへ、「うほさまの御命は、いまないが、なりや、手をさかし、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。かつて、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつつ、あたるを見む。二十日もかの月晴かし、いだれられて、子どもはあたるやと大はべり、心をしつまし、愛を表す。
御ほねより、御みたひさまへ、申上げる。

御はほねに、きこし、おほによろこび給ひて、まんしゅ、
ひて見とむて、御前へ申され、御覧し、おほにたけたるふ。

これは、正月十五日、御まへにやまをたて、大みやうのゆる
ては、よりときもの御さし、八百八十と聞いていこだ。

には、大御しよ様の御さしきをはしめとして、八ケ国の大みや
思うゆのうへかた、じゃうるしぐめの御さし、数しらす。

に、こまいたつへきかたもなし。

十二人のや乙女、七拾五人のみわ人、かくらをそしし奉る。

「伊勢のはまをき、なにははやあし、かまくら、たき、あし
いまやうはしめ奉り、まつへはに、いまやう、てこしのち
やかむすび、せんしゅゆの舞、きぞくしゅゆのはに、かいた
ふたり。

二はんに、きせ川のかつる、しはりはきをうたふたり。

「大さか山ののるの、くらもぬ影をやなかむら、せたの
から多ののちとき、かすみくもむたうか、み山、ふねのせき屋
の板きし、かりねのゆめ、さめかひのしゆく、ものふり
せは、おはりの国や、みかわなる。八げのくもて、物や
なのは、かさびのゆめのきしむ、さよの山のせとをしむ、つか
ゆめのおくみきのしゆく、とこにかれてのぼるあまを舟、こかれ
てものやおもふるん、ま

はたまはりたり、としは十二の春のなれは、十二ひとけをしやう
よくして、花の袖をかへ、かく屋のむしろより出る。物に出
くたとふれは、くわぼくをたたふ家の、谷の戸出るふせひ

も、これにいかはかまくら山、かまくらは、かかふうとうけた

「あらめたたのかまくら山、かまくらは、かかふうとうけた

はるはまつたくもかや、あぶきかやつす、すむ人の
心はす、しかるん。秋は露おおく、かやつ、いつもかやつ

ゆきの下、まんなかはばかゆ、かやつ、つるのからこまり。

ちて、むりゆのみきはたう波は、いひし、つるのからこまり。

か世は、ちたてかゆ、かゆめのせし、むるい、かうは、かやつ

ゆきの、たかじや、あひおの松、まんさくくくは、いの

をうと。とうはうさくの九せんさい、うつらわるの八あん

の、しやかみやうこしのまんさい、せい。うわほうのその

歳、しやかみやうこしのまんさい、せい。うわほうのその

一七九一
「もいるをそなかさる。」
そのち、よろともは、まんしゆに、引て物をさせんとて、
しのうてつかの里、一まんてやうの所をは、まんしゆにて、
ふしわた、せんは、まんしゆか宿へ、そくをくられること。御所様
よりの引て物には、よきかね、三百りやう、みのしやうほ
たるたくは候へ共、母の心のそろしきものたれは、急し
なへのほれとて、御いとま給り、まんしゆ、なめによろ
こひ、から系をひきつれて、しなのへこそ帰りする。
下に、二十三日にくたとし、帰りには、五日と申に、て
つかの里へおちついて、うはにかうを見申せは、万事、ゆか
しなきにふれて、今をかきりと見え給ふ所へ、まんしゆは、
はやきに申する、がかかさま、われくは、まんしゆにて候。是は、
幅大はさつの御はうへんにて、いまやうをうたひ、御よりや
う給り、二たせあまり、ろうしやる母をたすけ、数のた
からたまはり、しそんともにはんしやるも、まんしゆ姫
の、おやかくのゆへなりとこそ、かげたまはれ。かゝるめ
てたき物語かなど、かんせぬ人はなかやけり。